

(様式 5)

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立にいかわ総合支援学校・教諭・佐藤一秋
- 2 研修期間 令和4年9月29日(木)～令和4年10月1日(土) 3日間
- 3 調査研究課題 視察先に学ぶ特別支援教育に生かすキャリア教育・インターンシップの取り組み方について
- 4 研修機関等 青森：おしごと体験広場キッズハローワーク実行委員会
大阪：一般社団法人関西経済同友会、関西キャリア教育支援協議会（関西生産性本部）、大阪府教育庁/大阪市教育委員会、大阪科学技術館

5 研修の概要

(1) おしごと体験広場キッズハローワーク実行委員会

特例認定NPO法人SEEDS NETWORK 代表の大西晶子理事長から、おしごと体験広場キッズハローワークの取組と今後の展望についての話伺った。この取組は、単なる職業体験にとどまらず、社会体験、身近な生活にまつわる体験として地域の子供たちに「おしごと体験」を提供する地域コミュニケーション事業としての様相を醸し出している。体験ブースを担当する企業や個人は、SNSを通じた呼び掛けに応じて集められるため、固定化されない。そのことで、キッズハローワークの理念が地域に広まっていっているように感じた。



開催時間は一コマ約45分で小学生の授業時間に合わせて設定してある。仕事の種類も数多く、開催日も1回で終わらない。間を置かず年間4～5回程度と継続的に開催されていくことで、地域との一体感も高まっていくように感じた。体験会場では、求人票、個人プロフィール、仮想通貨なども設定され、より本物感が出て、働くことの現実味も増している。体験ブースを担当する大人も、単なるスタッフではない。経験豊かな職人が本気で教えることで、子供たちは好奇心を刺激され、緊張感ももちつつも居心地の良さを感じ、また来てみたくなる仕組みに仕上がっていると思った。特にキッズハローワーク「りんご編」では、りんごを育てる農家、農家が使う道具を作る会社、りんご畑で使う機械を開発・販売する会社、りんごの食品加工・製造の会社、りんごの運送業の会社が一堂に介して仕事体験が行われた。これは、青森県の基幹産業としての「りんご」でつながる地域社会の仕組みが、うまくこのプロジェクトを支えていると言えよう。「りんご」を軸に、仕事と私たちの暮らしがつながっている、誰かの生活を支えるために仕事があり、自分がその仕事の一部を担っているという実感ももちやすくなっている。これこそがキャリア教育の根幹であり、教育的効用が出ているのではないかと感じた。現代において、こういった場の提供、機会が必要であり、求められているのではないかと考えさせられた。理念から仕組み、運営に至るまでの体制が整えられており、話の中から参加するすべての方々の熱意が伝わってきて、実際に開催されている現場の空気を感じてみたくなった。

(2) 関西経済同友会

企業経営者が個人で参加する民間非営利団体であり、現下の様々な問題について、提言を行い、行動する組織である。講演、視察、実地体験などを行い、会員相互の切磋琢磨と親睦交流を図っている。大阪は富山よりも規模が比較的大きいようで838名の会員から成っている。50代以上のベテラン経営層が大半を占めるが、ベンチャー創業者、二世三世経営者といった若手も参加している。30以上の委員会を設置し、企業経営、関西の成長、政治経済社会課題の様々な問題に対し徹底討論を行い、提言、実行に移している。今回



の発表では、我が国を支える基盤となる「人づくり」の在り方を見直すため、教育の質の向上を図り、社会全体で人材を共創する初等教育への転換を目指し、企業、教育現場、教育行政の三位一体説を提言されていた。この内容は、学校にすべてを任せるのではなく、もっと企業や行政も連携していかななくてはならないといった、私たち教員にとっては心強い提言であるように感じた。教育現場の課題として教員の業務量の削減や学校外プログラムの活用を挙げ、具体策として外部人材の活用、教員の時数削減の制度改革、ICT を活用した学校間・学校外連携の拡大、学校企業間の人材交流などが挙げられた。まさに私たち教員が日頃より苦しんでいる部分を、広い見地から分析され改善策が示されていた。これが実現されれば、関西は全国に先駆けてよりよく成長するだろうと感じた。

(3) 関西キャリア教育支援協議会/大阪府教育庁/大阪市教育委員会



関西キャリア教育支援協議会（公益財団法人 関西生産性本部）は、小中高等学校におけるキャリア教育を産業界、労働界から支援する組織として設立されている。そして教育現場への社会人講師派遣、職場見学、職場体験、教員研修会へ企業人派遣を行う「情熱教室」というキャリア教育支援活動を行っている。当初は登録企業も多かったが、「情熱教室」への学校側からの派遣依頼が少ないことから、現在では退会する企業も増えてきている。教育現場と企業との仲介役としての役割を担っている点は、大規模な関西ならではの組織であると感じた。ただ、社会人講師を教育現場に派遣するといった取組は富山でも実施されており、どの地域でも同じような取組があることを実感した。

大阪府教育庁・大阪市教育委員会からは、キャリア教育についての大阪府・大阪市の取組について懇談した。大阪では貧困や虐待、自殺者も多く、そういった問題解決に向け、キャリア教育を通して改善しようと、自己肯定感や将来展望力を育むこと、職場体験学習としてのトライアルウィーク等が実施されている。また、「2025年日本博覧会協会教育プログラム」を活用した、わくわく・どきどき SDGs ジュニアプロジェクトがスタートしている。これは、2025年に開催される大阪・関西万博に向け、SDGs を学び、万博に興味・関心を高めてもらうことを目的としたプログラムからのプロジェクトであり、万博のテーマに基づいた「すべての命が輝くためのアイデア」について調べたりアイデアを考えたりし、小学校ではオンラインポスターセッションを行い、参加校同士で発表を共有する。中学校ではアイデアミーティングを行い、調べたことや考えたアイデアを企業の方に見てもらい、アドバイスをもらってブラッシュアップしたものを参加校それぞれが大阪府内にフォーラムを通じて発信する。いずれも地域や社会の課題を自分事として捉え、その解決に向けて他者と協働しながら探究的な学習に取り組み、社会に主体的に参画していける力を育成する目的で実施されている。これが大阪のキャリア教育の一つの新しい形なのだと納得した。

(4) 大阪科学技術館

企業や研究機関20社8団体27ブースで構成され、各出展機関の最新の科学技術を体験型の展示物で学ぶことができる。各企業名の看板が大きく見やすく付けられており、その企業で行われている仕事内容が、社会においてどういう役割を担っているのかが明確に示されている。そして、展示物やボタンを触ったり、めくったり、タッチしたりすることで情報が自動音声や映像で流れたり、コントローラーを操作してミニゲームを通して体験的に学べるようになっていて、小・中・高・大人とどの年代にも



対応した展示会場となっている。また SDGs の学習も含め、分かりやすく理解を深められるよう工夫された展示ブースとなっている。各ブースを回っていくと無人でありながら、体験的に学べるよう作られている工夫が素晴らしいと感じた。こういった施設に校外学習や修学旅行で訪れることは、生徒たちにとって大変よい学習になると感じた。また私たち教員にとっても、授業の参考になるのではと思った。

(5) 研修を終えて

この研修において現場の方々や富山経済同友会の方々、他校種の先生方との交流を通して、視野を広げて物事を考えることや、人とのつながりをもつことの大切さを実感した。世代、職種、校種を超えてつながり、互いに見聞を深めていくことで、自身のキャリアを豊かにし、生徒への指導に還元していくアイデアや具体策を生み出せるのではないかと思った。

地域とのつながりを実感できる取組を継続させること、社会的課題を自分たちの身近な問題へとつなげていく学習がキャリア教育につながるということも理解できた。そのことがキャリア教育の推進を促すことができるものと確信した。

本校、高等部では就業体験を行っている。この時期は学校生活から初めて社会とつながる場へと移行する時期でもある。それまでは放課後等デイサービスで社会との接点はあるが、これは主体的というより受動的な利用でしかない。

学校を卒業し、いよいよ社会で働くその練習の場としての学習を積むところが就業体験先である。体験先からの評価を通して、この社会との接点へ向かうにはどのような力をつけなければいけないのか、どうしたらそこで自分らしく過ごしていけるようになるのかを知り、学校や家庭生活での改善を踏まえて経験を重ねることで、社会に通用する力が身に付くのではないか。そのことが企業や福祉事業所がほしい人材育成にもつながり、学校が地域社会に貢献する役割なのではないかと考えさせられた。

今後、自分自身が学校において中堅教員としての役割を果たすには、大西さんのように思いを強くもち、実行していける力が必要だと思う。また富山経済同友会の方との懇談から、私たち教員は、日頃から問題意識をもって上司や同僚、保護者と話し、具体策を立て実行に移していくために、同じ方向を向いて生徒を育成していくことが不可欠であり、大切であると感じた。

最後に、このような大変貴重な経験をする機会を与えてくださった富山経済同友会の皆様、富山県教育委員会をはじめ、送り出していただいた本校のすべての方々に、心より深く感謝を申し上げ、研修報告とする。

